

---

# 夏至と僕

旅人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏至と僕

### 【Nコード】

N9063X

### 【作者名】

旅人

### 【あらすじ】

夏至の日に現れた蔓の塔。

しばらく月日経ちその混乱が落ち着いたかと思われたが……

## プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、見てくれたらありがたいです。

## プロローグ

2001年6月21日 15時35分

確か、夏至の日だったと思う。

大きな揺れが来た。

最初は大きな地震が来たのだと思わった。

しかし、揺れはすぐにおさまり安心して外を見てみると、

信じられないことが起こっていた。

まるで大木のような大きい蔓が何本も絡み合いながら天まで伸びて行く。

そして蔓で塔のようなものを創り上げる。

まるでその蔓で世界を侵食していくようであった。

私はこの時はまだ信じられなくて夢だと思っていた。

夢だと思ったのは私だけではないだろう。

蔓の塔が、そびえ立ってから、数時間後に蔓の塔から光が見えた。

そして蔓の塔から星のようなものが、彗星のように世界中にたく

さん流れていく。

それはとても美しいもので思わず、私はみとれてしまった。

## 夏至前(1)

俺は苦手な数学の授業でちっともおもしろく無いので俺は窓の向こうに見えている、

空高くそびえ立つ蔓の塔を見る。

昔はあの蔓の塔のが存在することが非日常的な風景に思えたけれど、蔓の塔も数年もたつと日常の風景にほとんど染まってしまっている。

でも蔓の塔の風景が日常になりつつあるが、そこにはなにが存在するのか分からない俺はあの場所には何があるのかを知りたいなあ。なんてことを思っていると、チョークがもの凄い勢いで俺の耳を掠めていく。

「ほら、村上ぼーつと外を見ていないで、この問題を解いてみる！」

数学担当で俺のクラスの担任である島田がもの凄い剣幕で言う。

ヤバイと思いつつ、焦るが今どこの問題をやってるのか分からないので答えられるわけないだろと思っていると、

「もう答えなくていい、特別に宿題を倍にしてやるから後で職員室に來い」

少し呆れながら口を開く。「ちょっと待ってくださいよ先生」

俺は抗議しようとしたが、ちょうどチャイムが鳴って、

俺の声が掻き消されたために島田に抗議することが出来なかった。

「よりによつてめんどくさい島田に目をつけられるとは恭介も今日はついてないわねえ」

後ろの席に座っている春が唇を歪ませながら、にやにやと笑う。

「どつでもいいだろ。つーかなんでお前は笑ってるんだよ」

「だって人の小さな不幸を見ると、なんだか面白いんだもの」  
にやにやしながら春は答える。

小島春は小学校からの幼なじみなのだが、昔から気がとても強く、

人とズレているというか、

電波をいつも送受信しているような奴で、中学校の時なんか「夢の中で私は飛べると言われた」と春は言って、

実際に屋上から飛ばうとして、怪我をした事があるくらいなのだ。

そんなこともあるせいかな、こいつに近づくような奴は、そんなに多くないのだ。

「相変わらずお前は性格が悪いというかなんか歪んでるな」

「あたしのどこが歪んでるっていうのよ？」

春はにやにやした顔から唇を尖らせてムツとした顔した。

「……」

俺は何か言い返そうと思ったが、ここで言い返すと、多分口喧嘩になるだろうしそれはめんどくさくなるので、何も言わなかった。

「まあ、いいわ。あんたはあたしの手の掌上で踊ってるだけだから」

さっきのにやにやした顔をしながら言う。

「なんでお前の掌上で踊らされてるんだよ」

「その時が来たら分かるわよ」

春の言うことは相変わらず意味の分からないことを言うなあ、なんて思いながら次の授業の準備をする。

「ああ疲れた」

こつてり島田に嫌味を言われながら居残りしていたのがやっと終わったので俺は腕を上には伸ばしながら呟く。

家に帰ろうとして校門を出たところで誰かに見られてるような気がする。

やっぱり俺が家に帰る途中もずっと誰かの視線を感じる。誰かが後ろをついて来てるのか？

そう思った俺は後ろを向くがそこには誰もいない。

気のせいだろうか、春だったら絶対幽霊だって言うだろうなと思っ  
た時、後ろの草むらからガサツという音を聞いて、

驚いて思わず後ろを見ると野良猫だった。このさっきから視線のよ

うなものを感じてたが、この猫だったのか。

「なんだよ、驚かすなよお前」

「にゃあ」

もちろん猫なんかには俺の言葉が分かるはずがなく、懐きやすい猫なのか俺のほうに飛びついてくる。

「残念だけどさ、俺の家は団地だから猫は飼えないんだ。ごめんな」

俺は猫に話しかけるように一人で呟く。

今度なんかエサでも持って来てやるのかなと思いつながら家に帰る。

「校長、島田ですが、入ってもよろしいでしょうか」

島田は校長室をノックする。

「ああ、島田君が入ってきてくれ」

校長は椅子に座りながら、書類に目を通していた。

「失礼します。あの用事というのは？」

「君もあの塔のことぐらいは知ってるだろう？」

校長は窓の向こうを見て、蔓の塔がある方向を指差した。

「もちろんあの塔があるの知らない人なんていませんよ。」

島田は何故校長がいきなりこんなこと言うのか分からないのか、首を傾げながら答える。

「では、あそこに人が行ったことがあるのは聞いたことは？」

「いや聞いたことなんて無いですし、だいたい政府はあんなところに近づけやしないと行ってたじゃないですか。僕も暇じゃないんで、これ以上関係無い話しをするなら帰りますよ。」

島田は少し呆れながら校長室を出て行くこととした瞬間

「では今までの話がこの学校と関係あると言ったらどうする？」  
今まで窓の向こうを見ていた校長は厳しい表情で島田に再び目をやる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9063x/>

---

夏至と僕

2011年10月28日04時19分発行